

PG A-5 個別支援における意思決定支援の教育方法1

～アセスメントから導き出される関係性の構築とスーパービジョン～

(現任研修演習編)

講 義

令和8年6月19日(金) 9:10～9:40

長野県 上小圏域基幹相談支援センター

所長 主任相談支援専門員

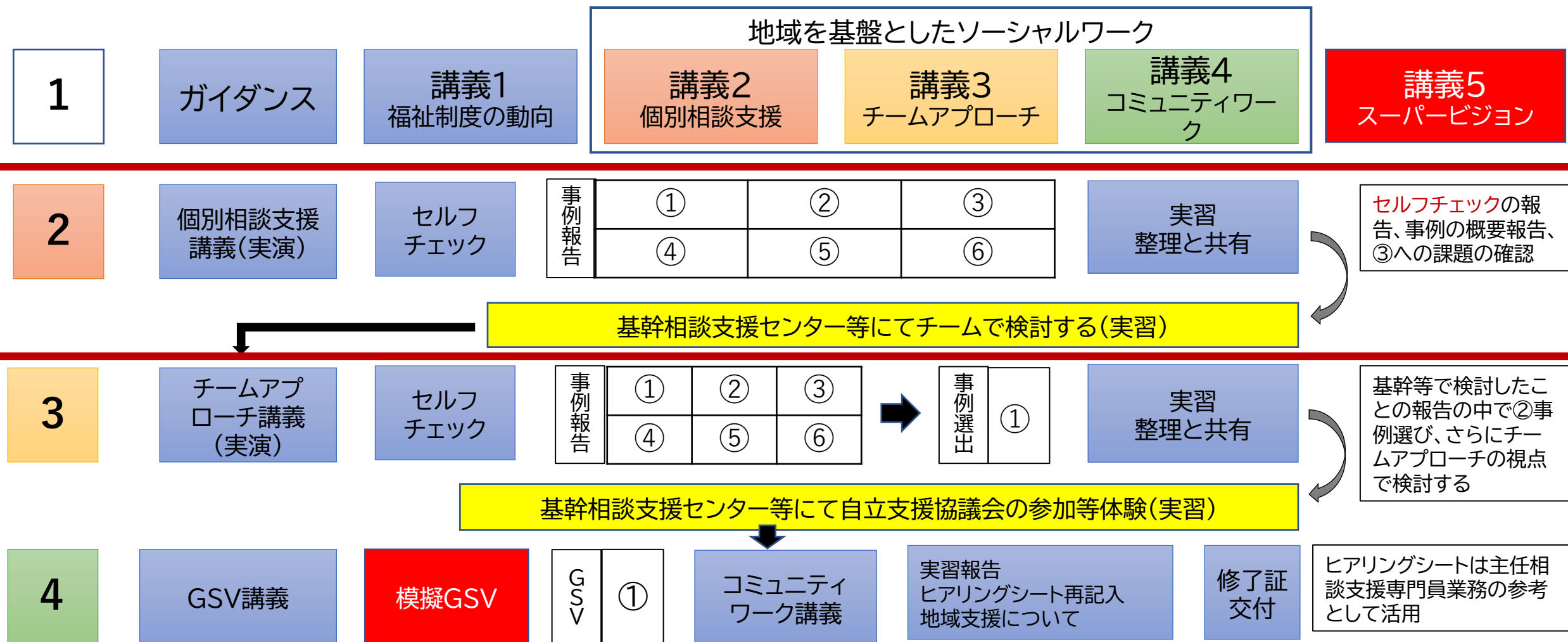
地域生活支援拠点コーディネーター

橋詰 正

現任研修の構造

獲得目標

- ①相談支援の基本的業務を確実に実施できる。
- ②チームアプローチ(多職種連携)の理論と方法を理解し、実践の中でチームアプローチが実践できる。
- ③コミュニティワーク(地域とのつながりやインフォーマルの活用等)の理論と方法を理解し、実践できる。
- ④スーパービジョンの理論と方法を理解し、助言・指導を受けることの必要性を理解する。



日常生活・社会生活等における意思決定支援のプロセス (意思決定支援ガイドライン)

人的・物的環境の整備

- ◎意思決定支援者の態度 (本人意思の尊重、安心感ある丁寧な態度、家族関係・生活史の理解 など)
- ◎意思決定支援者との信頼関係、立ち会う者との関係性への配慮 (本人との信頼関係の構築、本人の心情、遠慮などへの心配)
- ◎意思決定支援と環境 (緊張・混乱の排除、時間的ゆとりの確保 など)

意思形成支援

適切な情報、認識、環境の下で意思が形成されることへの支援

[ポイント、注意点]

- ◎本人の意思形成の基礎となる条件の確認(情報、認識、環境)
- ◎必要に応じた 都度、繰り返しの説明、比較・要点の説明、図や表を用いた説明
- ◎本人の正しい理解、判断となっているかの確認

意思表示支援

形成された意思を適切に表明・表出することへの支援

[ポイント、注意点]

- ◎意思表示場面における環境の確認・配慮
- ◎表明内容の時間差、また、複数人での確認 意思表示支援:形成された意思を適切に表明・表出することへの支援
- ◎表明の時期、タイミングの考慮 (最初の表明に縛られない適宜の確認)
- ◎本人の信条、生活歴・価値観等の周辺情報との整合性の確認

意思実現支援

本人の意思を日常生活・社会生活に反映することへの支援

[ポイント、注意点]

- ◎意思実現にあたって、本人の能力を最大限に活かすことへの配慮
- ◎チーム(多職種協働)による支援、社会資源の利用等、様々な手段を検討・活用
- ◎形成・表明された意思の客観的合理性に関する慎重な検討と配慮

1. 意思決定支援

- ①相談支援において「本人の意向を無視していないか」を意識することの必要性
- ②相談支援において「本人の言葉の意味を吟味しているか」をその都度考えることの必要性
- ③相談支援において「支援者の都合が優先されていないか」を常に考えながらかかわることの必要性
- ④計画作成時「既存の社会資源だけが支援の前提となっていないか」を見直すことの必要性
- ⑤相談支援のプロセスにおいて「先に支援者の結論ありきで話を進めていないか」を振り返ることの必要性
- ⑥本人や家族等から育ってきた環境の中で興味を持ったこと、楽しかったこと、楽しい時や嫌なときの表情等を知る
ことの意味

2. インテーク

- ①信頼関係の基礎を構築するための大事な場面
- ②福祉サービスに限定したやり取りではなく、主訴等の背景を丁寧に聞くことの意味
- ③今後の相談支援の見通しを説明し、利用者から同意を得ることの必要性

3. アセスメント

- ①アセスメントは、利用者から表出される全てが大切な情報である
- ②生活歴を丁寧に聞くことは、利用者への理解が深まることになる
- ③ストレングスは、健康な側面に着目した「本人のポジティブなところ、強み」であり、支援には欠かせない視点である
ことから、対話の中で常に意識する
- ④情報の整理は、利用者から得た情報をその都度整理し、エコマップやジェノグラム、ストレングス票等のツールを活用することの有効性
- ⑤アセスメントの能動性・構成力を高めるには事例検討やGSVなどの場面に参加することの重要性

4. モニタリング

- ①基本相談で得られた情報による支援者の見立てがモニタリングに影響している
- ②サービス利用の有効性だけでなく、人との関係性や環境の変化など、多角的な視点をもってモニタリングを行う
こと的重要性

個別相談支援とケアマネジメント

【獲得目標】

- ①本人を中心とした**個別の相談支援の実践に必要な相談援助技術**について説明できる。
- ②自身の**個別の相談支援実践を振り返り、維持・向上**すべきことに気づく。
- ③**個別の相談支援の実践事例を振り返り、検討**することで個別相談支援の能力の向上を図る。

【学習ポイント】

①知識と実践(事例)の結び付け

意思決定支援の展開/インテーク/アセスメント/モニタリング

②個人演習・セルフチェック

意思決定、インテーク、アセスメント、モニタリングのポイント

③実践報告・検討を通じた個別支援の能力の向上

意思決定のポイントとの結び付け/信頼関係の構築や自己肯定感を高めて行く支援の展開/助言や指導を受けることの重要性

【再確認と解釈】

個別支援の**個別**とは

一人ひとり、異なるため、その人にとっての実現できるようにするアプローチが必要。画一的なアプローチ(支援)は存在しない。

日々の相談支援実践を振り返らずして、相談支援の成長は望めない。時には、振り返りを地域で検討する機会が提供されることを、相談支援従事者初任者研修の実習として位置付けられている。

相談支援従事者現任研修の実習は、推奨とされている。日々の相談支援実践の振り返りは、5年に1回行えばよいわけではない。そもそも、**【地域におけるOJT】**(振り返りの機会)は、通常業務で行っているはずである。

【振り返り】での気づき、「なぜ、〇〇したい」と言ったのだろうか？ = アセスメント(相談支援専門員として、この言葉を自分は捉えたのだろうか。**スーパービジョンも意思決定支援も、関係性の構築が前提にある。アセスメント力の向上は、定期的なトレーニング場面によって培われていく。**

事前課題で事例作成

1. ケースレポート力(日々のケアマネジメント場面での実践発表)
作成事例の内容を、受講者に焦点化して伝えることが重要
2. グループスーパービジョンを活用して実践事例を振り返る。
相談支援従事者の更新研修後、5年間のGSV実践が業務化されているかによって、グループの研修効果は左右される。
3. 日々の実践が、きちんとアセスメントされており、意思決定支援ケースとしての研修ツール
困難事例として、アドバイスや回答が欲しいといった事例作成は論外である。

演習講師の養成

(実習担当者の養成)

1. 演習をスムーズに目的に沿って進める上では、各グループの演習講師が司会者の進行やGSVの展開で、ファシリテート機能を発揮できる。
2. 対面研修のメリットは、6名の受講者が理解に苦しむ中では、直接理解を深める説明を、研修中の空き時間にも提供できる。
(分からないまま送り出された場合、実習担当者は再履修してからでないと、スーパービジョンには至れない) = (意思決定支援の展開ができない)
3. 実習担当者は、研修期間のスーパーバイザーではなく、地域のOJTを担っている存在に移行してきている。
(業務としての実践を積み重ねている)

演習

個別相談支援(意思決定支援)

1. ミニ講義

研修事例によるミニ講義により、意思決定支援、セルフチェックリストの記入の講義

2. 演習

- (1) 事前課題の報告と6名全員の事例のグループ検討(グループ構造)
- (2) 実地研修(実習)の課題整理と演習講師からの助言
- (3) セルフチェックによる振り返り
- (4) 実地研修(実習)への課題の理解

重要ポイント(事前課題の事例は、一緒に学ぶグループメンバーの研修ツールである責任感が現任研修にはある)

【事前課題の説明】

実践事例が、意思決定支援がイメージされて行われているものであること
(課題説明をより丁寧に実施すること)

ミニ講義と演習の実践

研修事例によるミニ講義により、意思決定支援、セルフチェックリストの記入の講義

- **利用者のニーズと診断(ラベリング)の危険性**

利用者の障害特性を正しく把握し、利用者と環境の相互関係を理解から支援に結びつけていく

- **見立ての必要性**

障害の評価ばかりでなく、利用者のストレングスに着目し、個々の利用者の障害特性に基づいた支援的な具体的な見通しを立てる

- **診断と支援**

診断は短所・支援は長所に着目

- **実践事例の紹介**

プロフィールと事例の概要/主訴(本人・家族等)/本人を取り巻く関係図/相談の経過/情報入手⇒整理・統合(アセスメント)/利用者と相談支援専門員の関係(先入観)/意思決定支援の再確認/見学・体験への相談支援(意思決定支援)/繰り返しのアセスメントとケアマネジメント実践

実習例（1回目）

- 演習1日目で個別支援(意思決定支援)に関する明確化した課題の解決に向けて、地元(地域)へ戻り、基幹相談支援センター等により、スーパービジョンを体験をする。
- ※ ここでは、個別支援に関する意思決定支援に特化した、**スーパービジョンの展開**として整理する。

現任研修 実習 報告書①

1. 実習で取り組む内容や基幹相談支援センター等の共有方法

演習前に受講生が記入

①自己の振り返りや実践報告・検討を通して確認された支援者自身の気づき・グループメンバーからの助言

②実習期間で行う取り組む内容

グループメンバーからの助言に優先順位をつける。

②について基幹相談支援センター等との共有方法や必要とする助言（アポイントも含む）

演習講師から助言

取り組む内容が漠然としていたり、実習期間に行う内容が不明瞭となるため、演習講師が助言と実習で対応可能な内容かを判断して伝える

本シートを実習に持参して、気づいた事・学んだことを、赤字で記入する。

見え消し記載も、
研修構造の一部

実習

実習担当者は、宿題の答え合わせをせず、意思決定支援の理解を確認し、意思決定に繋がる気づきを本研修でグループメンバーに提供する効果を意識して、送り出す役割を持つ。

参考資料(実習1)

実習への送り出しは、各グループの演習講師確認で研修効果が大きく左右する。
(実習担当者も共通理解してもらうための事前情報があると、より研修効果は高まる)

2. 実習期間に取り組んだ内容・効果・基幹相談支援センターとの連携

実習後に受講生が記入

1-②の取り組みとその効果

基幹相談支援センター等との共有内容や助言等

実習期間の気づき（考察）

現任研修 実習 報告書②

演習時に受講生が記入

1. 地域の相談支援体制・（自立支援）協議会

地域の相談支援体制について（指定特定・委託・基幹が担う役割や機能がどのように整理されているか）

活動エリアに戻り、相談支援を展開する上で、知り得ておくべき情報
相談支援の展開の中で、相談できる機関や市町村の相談体制など

（自立支援）協議会について（協議会の役割や機能がどのように整理され、展開されているか）

地域課題を取り上げて協議している仕組み（相談・解決の糸口）

実習時に行くこと（相談体制や協議会について、どのようにして調べてくるか）

演習講師から助言

取り組む内容が漠然としていると、実習期間に行う内容が不明瞭となるため、演習講師からの助言と同意が必要

本シートを実習に持参して、気づいた事・学んだことを、赤字で記入する。

実習

実習担当者は、相談支援実践地域での地域作りの実践者として活躍するための情報を伝え、本研修でグループメンバーに提供する効果を意識して、送り出す役割を持つ。

参考資料(実習2)

実習への送り出しは、各グループの演習講師確認で研修効果が大きく左右する。
(実習担当者も共通理解してもらうための事前情報があると、より研修効果は高まる)

2. 実習時の取り組み内容・効果・基幹相談支援センター等との連携

実習後に受講生が記入

相談支援体制について分かったこと（実情や課題など）

（自立支援）協議会について分かったこと（実情や課題など）

研修終了後、地域支援をどのように展開していくか（基幹相談支援センター等との連携も含む）

PG A-5

個別支援における意思決定支援の教育方法1(現任研修演習編)

演習 ロールプレイと振り返り

【個別支援における意思決定支援の教育方法1】
(現任演習編)

令和8年6月19日(金) 9:40~10:30

演習構造(グループスーパービジョンのステージ)

1)アイスブレイク【1名2分×6名、役割分担8分=計20分】

2)事例報告・検討【発表時間1名30分】

事例の読み込み【3分】/事例報告【7分】/事例の印象や質問【10分】/意思決定支援の展開/検討課題の支援方法の検討【10分】

時間調整は、進行役から伝える。(都道府県研修では、時間調整は演習講師が行う。質問と支援方法を同時に述べることも想定されるためファシリテーションを行う。)

○報告(現任者としての実践の振り返りの機会である)

1)読み込みの時間の中で7分程度で報告できるようまとめる(ケースレビューの力を付ける実践準備の場である)

2)要点をおさえ端的に説明、説明にあたっては解釈と支援経過の説明を中心に行うが、意思決定支援についても報告するよう指示する

3)事例提供者が何を検討したいのか、検討したいことに対してどのように取り組んできたかを中心に説明するよう指示する

○質問

1)検討課題を確認する。曖昧な場合は、「〇〇について困っているのか、〇〇について検討して欲しいのか」と検討したい内容を具体的にする

2)意思決定支援のポイントを留意して支援が行われているか質問するよう促がす

3)オープン・クエスチョンを避ける(具体的に何を知りたいかが分かる質問をする)

例:お父さんはどんな人ですか?→お父さんの性格?仕事?協力?など何を聞いているのか分からない

4)質問・発言の意図を聞く

質問が漠然としていると、答える側も何に対して質問しているのか分からないため、「もう少し具体的に質問して欲しい」「どういうことでお聞きになりたいのか、もう少し具体的に言ってほしい」など促がすことで、質問した人も自分が何を聴きたいのかが明確となる

5)質問者に解答か何が分かったかを述べてもらう

質問する→答える→次の質問に移るといったやり取りが一般的だが、時に、質問する→答える→答えを聞いて何が分かったか(判断できたか)を尋ねる場面を作ることで、何かしらの理解に結びつけることができる

(検討)

1)セルフチェックシートを参考にして意思決定支援の展開について確認する

2)検討課題を明確にして具体的な支援方法を検討する○留意点

○留意点

*アイスブレイク時にグラドルールを確認する

*報告者が時間内に報告できるよう時間管理等を行う

*質問が出ない場合は、報告を受けての感想や事例の印象を述べてもらうよう促がす

*報告者は検討課題の対応を協議している間は意見を述べないよう注意

事例提供者 (講師から、事前に 依頼します。)	司会 (講師から、事前に 依頼します。)	発表者	質問・助言①②③④
--------------------------------------	-----------------------------------	------------	------------------

	書式4	演習役割シート				グループ
	発表者	司会	書記	質問・助言①	質問・助言②	質問・助言③
①	講師	昨日 依頼者				
②						
③						
④						
⑤						
⑥						

イニシャル	八重洲 あきら (やえす あきら)様	性別	男性	年齢	49歳	障害名(程度):	療育手帳 B1 自閉症
						障害支援区分:	区分 2
福祉サービスの利用状況:		就労支援(B型)事業所に8年間通所。同法人運営のグループホームを利用中					

検討したいこと(相談支援専門員が支援の中で困っていること)

安定した生活状況にあるが、グループホームのメンバーと良い関係が築けず、一人で外出することが多い。定期的にグループホームを訪問し、面談する中で、グループホームの生活に不満そうな意図はつかめるが、解決の方向性がつかめない。

主訴(相談に来た理由、どうしたいか)

グループホームでは、あまり話したくない。自由に干渉されたくない、安心した場所で過ごしたい。

利用者の特徴

やせ型の体格で、穏やかな表情をされている。寡黙であり人との関わりを求めない。外出も一人ですることが多い。人を責めたり、怒ったりすることは少なく、なかなか自分の想いを伝えにくい。グループホーム世話人とは一緒に買い物に行く関係は保っている。

生活歴(どのような生活を送ってきたか、楽しかったこと、興味を持ったこと、悲しかったことなどのエピソード)

県外で生まれ、中学校時代に父が亡くなり、中学校卒業後に母の実家に転居した。地元特別支援学校高等部に入学し、小さな会社に見習として就職したが、職場の人間関係に悩み1年後に退職し自宅に戻って数年間は母の手伝いをしていた。地元で就労支援事業所が立ち上がり、市役所の福祉課担当者から勧められて、就労支援事業所(B型)へ通うようになり8年が経過した。4年前に母も病気で他界し、グループホームへ入居調整する中で、成年後見人が選任された。平日は、休まず通所され、土日は昼間はほぼ一日一人で出かけているグループホーム生活。

社会的状況(家族関係・友人関係・学校・職場・福祉サービス利用など)

市内に叔父が一人いるが高齢であり、現在関わりは無い。関わりたい友人はいないが、一緒に働く仲間の中で、嫌な関わり方をしない穏やかな人が好き。通所先の女性の支援者をしたっている。小中学校は県外の学校で特別支援学級に入級し、高等部から特別支援学校で就職を目指して就職した。現在の活動は、クリーニング作業や屋外活動を中心に行っている。障害福祉サービスは、共同生活援助と就労継続支援B型(月～金)利用中。

①誰が困っているのか(本人・家族・学校・職場等) *複数可

本人 ・ 相談支援専門員

②いつ頃から困ったことが生じたのか

相談支援を始めて1年前くらいから、グループホームの生活に不満がみられるようになった気がする。世話人にも、本音を言わないので、何となく過ごさずらさを感じている状況であることを感じながらも、モニタリングで息抜きの外出支援をグループホームに依頼しながら支援を継続して来た。

③主訴に対して、様々な情報からあなたはどのように解釈したか(見立て) ※BPSモデル

一軒家の4人のグループホームの個室利用であるが、同居者との食事場面や、順番での入浴・洗濯等の生活で、指示や世話を焼かれたくなく、苦手な利用者との生活にストレスを感じているのではないかと。通所事業所は支援者も一緒に活動し、利用者間の関係にも配慮してくれるので困らず働けている。以前のように、家族と暮らしていた生活に戻りたいと思っているのではないかと。それも出来ないから、一人で暮らせないかと感じ始めているのではないかと。

④検討したいことに対して、あなたはどのように支援をしてきたか(支援経過)

グループホーム生活について、何が嫌なのかを聞いても応えてくれない。通院や買い物に行く世話人との外出は日用品購入であり、望んでいる外出には至れていないため、旅行や夜の夕食などの、外出支援計画を依頼して来た。

定期的なモニタリング会議でも、頑張っている姿を皆で賞賛して応援を続けてきた。成年後見人も、働いた収入の中で十分な小遣いも渡されている。抱えているストレスを話して良い支援者との関係を作りや、望む生活を一緒に考える関係に辿り着きたいと相談中。

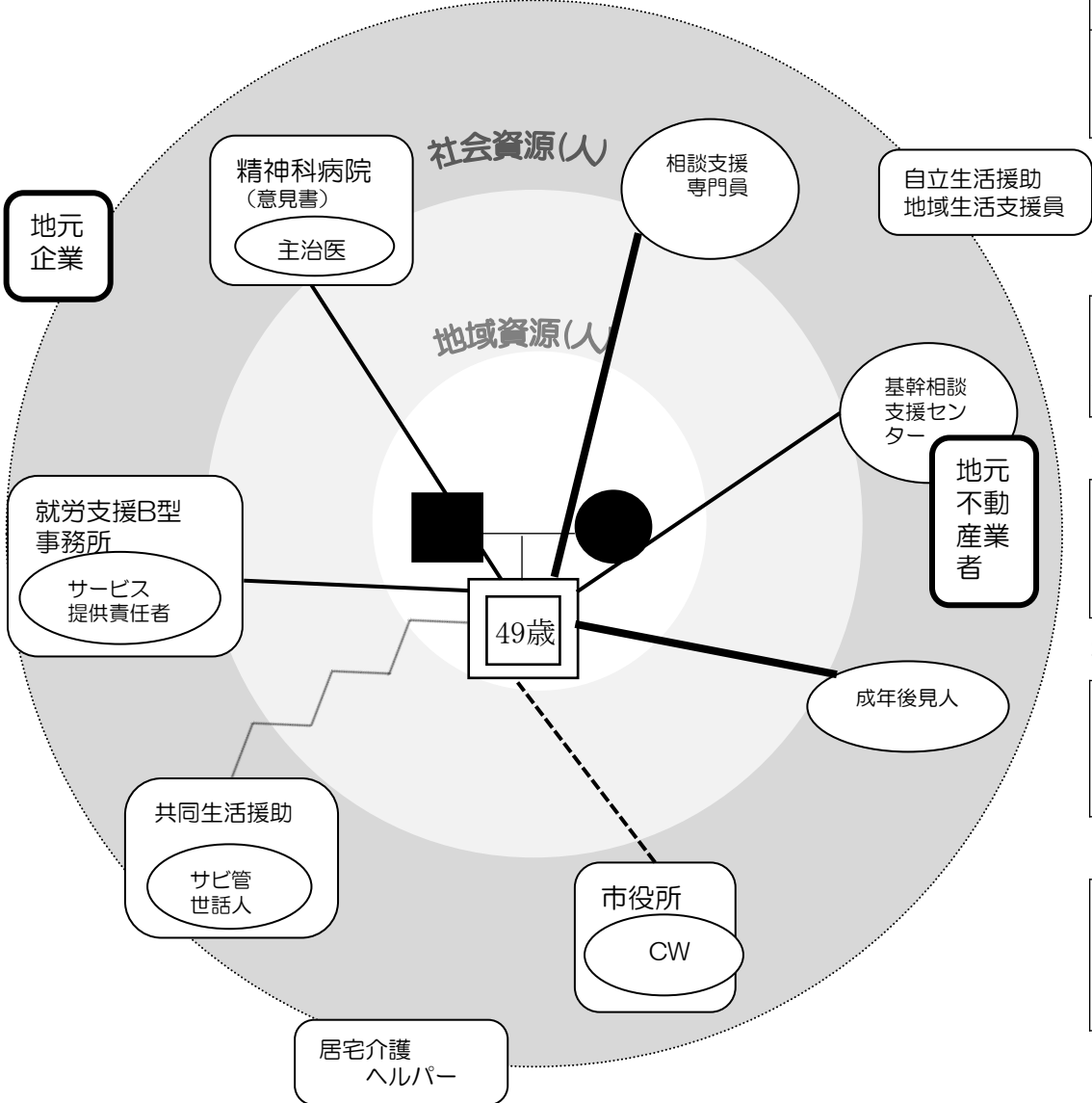
⑤その結果改善されたか

干渉されたり、想いが伝えられないまま、自分の願いと違った方向で物事が決められてしまった過去のエピソードがストレスになっていることを、夕食外出で一杯飲んだ時に初めて話してくれた。今の生活から新しい生活の場所に移りたいことは、「グループホームは卒業する」という言葉で伝えてくれた。(具体的な生活の場所のイメージは持たれていない感じがした)

(検討)意思決定支援の展開で気をつけること

(検討)検討課題に対して具体的な支援方法

モデル事例



チームアプローチにおける支援方針	伝えられない想いを受け止め、新たな生活を一緒に探していく
チームアプローチの展開で困っていること	現在のグループホームでの悩みを、グループホーム内で再調整することを念頭に検討を続けて来たが、グループホームから一人暮らしへのイメージをチーム全体で理解し共有していくには、相談支援専門員としてどのように振舞えばよいか。

利用者と地域資源(人)の関係性

生活するグループホームは、小さな商店街の一角にあり、駅やコンビニもある。通所先も車で10分ほどの場所にあり、事業所の送迎で平日は商店街を歩いたりする機会はほとんどない。

利用者と社会資源(人)との関係性

関わりは安心できる支援者のみであり、他の利用者との関係はあまり好まない。グループホームの世話人とは日用品の買い物は一緒に行く。相談支援の外出の誘いは嬉しそうである。

相談支援専門員と地域資源(人)および社会資源(人)との関係性

相談支援専門員から、外出支援の誘いは嬉しそう。成年後見人には、手紙で要望を伝えることがあり、頻度はストレスが溜まってきている時に多い。グループホームでは、我慢して独りで部屋にいる事が多く、他の利用者との接触をなるべく避けている。

チームアプローチの展開で困っていることへの対応策

サービス担当者会議を開催する中で、それぞれの支援者が本人の想いを応援する人であることを伝える。本人・成年後見人から、手紙での願いを報告しても良い了解を得て、会議参加を依頼する。

ロールプレイの配役決め

- 発表者(事例提供者役)

※本日の事例提供は、各グループの講師が努めます

- 司会(進行役:ファシリテーター)

※本研修で昨日依頼した方に、進行役をお願いします。

※都道府県研修では、

スーパーバイザー(演習では、演習講師がファシリテーター役です。)

- 書記(発表者)

- 質問・助言役(他グループメンバー)

事例提供者(メモ)

八重洲 あきら 様

グループメンバーのアイデア記録表

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.
- 6.
- 7.
- 8.
- 9.
- 10.
- 11.
- 12.
- 13.
- 14.
- 15.
- 16.
- 17.
- 18.
- 19.
- 20.

【個別支援における意思決定支援ロールプレイ】

- ・事例の読み込み【3分】
- ・事例報告【7分(ケースレポート)】
- ・事例の印象や質問【10】
- ・意思決定支援の展開/検討課題の支援方法の検討【10分】

9:50~10:20

【個別支援における意思決定支援ロールプレイ】

グループごとの振り返り

10:20~10:30